
福島県における自由大学運動

はじめに

福島県における自由大学運動については、1923年1月にタクラ・テルが「文学論」を講義したことが知られるだけであった。蛭田元起⁽¹⁾・小泉信三⁽²⁾が現地調査をしたことはあるが、その詳細は明らかにならなかった。『原町市史』第11巻（特別編IV、旧町村史、2008年）も、相馬農蚕学校が地域密着の教育活動として「原町文化学院」を開設したことを注記で簡単に触れているに過ぎない（南相馬市教育委員会博物館市史編さん係編 2008：245）。

ここでは、その後の史料収集をふまえ、現在判明していることをまとめ、報告しておきたい。

1. 田口富五郎と東北文化学院

福島県相馬郡原町に東北文化学院を創設した田口富五郎は、茨城県北相馬郡取手町の出身で、1922年3月に上田蚕糸専門学校養蚕科を卒業し（『上田蚕糸専門学校一覧 大正十一年』1922年）、同年4月に福島県立相馬農蚕学校教諭として赴任している（『相馬農業学校教員名簿』、小泉 1979：3）。

田口が、いつごろから教育の問題に関心を持つようになったのかは明かではないが、田口が蚕糸専門学校3年のときに、自分の苦悩を綴った文章の中で、「何のために学問をするのか。学問じやない学校の門を潜るのだから。学校は何のためにあるのだ、俺のためには、学校は心的破壊の権威だ。そうでなければこんな苦痛をして学校にある理由がないのだ。パンの征服のためにのみ学校はあるのだ。哲学も道徳も俺には無用だ。試験と云ふ大きなローラーが倫理を破壊して、之に対する不平と反抗をギシギシ押し潰してしまふのだ、そして無理にも人間を型へ入れねば止まない。型へ入らなければ生きて行かれないのだ。之が学校の使命なのだ」と、学校が学問をする場ではなく、「パン」を得るため「型」にはめた人間をつくる場となっていることに批判意識を持っていたのが知られる（田口 1922a：29）。このような既成の学校に対する思いを抱いていたがゆえに田口は、自由大学の理念に共鳴するところがあったと思われる。

田口は上田蚕糸専門学校3年生のときに文芸部から独立して弁論部を設立し、幹事となっている（部長は教員の早川直瀬）。1921年5月の弁論部発会式には神川村の金井正を招いて農民美術についての講演を行っている。21年8月には長野県下の中等学校を巡回講演する「カレッジエクステンション」を実施しているが、蚕糸雑誌社主筆の猪坂直一も招かれて同行し臼田、埴科、穂高農学校で講演している（田口 1922b：17-21）。こうした関係から田口は、猪坂から信濃自由大学の創設を知り、「信濃自由大学趣意書」も入手していたと考えられるが、開講してからの自由大学を聴講していたかは不明である。「信濃自由大学会計簿」には田口の名前は記載されていない。

田口と相馬農蚕学校との接点は、東北地方への修学旅行中に宿泊地における中等学校を歴訪する計画を立て、21年10月26日に山形県立楯岡農蚕学校、28日に相馬農蚕学校を訪問して講演をしたことにある。相馬農蚕学校では、田口は「地方文化と農業労働」という題で講演しているが、「聴衆の過半は当業者にして何より意を強ふした」と感想を記し、閉会后「当校長並に当業者諸君と先輩の宮澤、久保両兄諸君から鄭重なる歓迎会を開いて頂いた」という（田口 1922b：23）。こうしたことから田口は、相馬農蚕学校の校長である佐藤弘毅とも知り合いになり、これが相馬農蚕学校に赴任するきっかけにもなったと考えられる。

相馬農蚕学校のある原町は、1900（明治33）年には原町駅前に生糸市場が開設されており、また、1914年には石川組原町製糸所が開業し⁽³⁾、福島県では信達地方に次ぐ養蚕・製糸業の盛んな地域になっていた。相馬農蚕学校は、1921年4月に相馬郡立農業学校から県立に移管され、名称も県立相馬農蚕学校に変更されている。県知事の提案理由説明では、学校として特色あるものを持たせるとし、「普通農事」を教授するとともに、「養蚕の方にも充分に力を注ぎたい」という理由をあげている（相農史編纂委員会編 1973：151-152）。学校の県立移管の背景には、地域の養蚕・製糸業の発展があり、蚕糸業界に寄与する人材の育成があったといえる。

田口は、赴任するとすぐにこの地で自由大学運動を起こす準備を始めたことになるが、どのような理由で自由大学運動を起こそうとしたのか、また、「自由大学」の名称ではなく「東北文化学院」の名称にしたのか、それらを明らかにする文章等は発見されていない。「東北文化学院の開設」を報じた新聞記事によれば、東北文化学院の趣旨について、

「学問の中央集権的傾向を打破して地方一般の人々が産業に従事し乍ら自由に大学程度の教育を受くる機会を得んが為に総合長期の講座を開き主として文化的研究となし何人にも公開する事を目的とします。従来の夏期講習会に於ける如く断片的短期的の研究にあらずして統一的連絡的研究に勤め開講期以外にも会員の自学自修の指導にも関与する事に勉めるものであります」

と記し、講座の種類としては「哲学、哲学史、論理学、美学、社会学、心理学、宗教学、文学概論、教育学、法律学、経済学、社会政策」の12講座をあげ、開講時期は「聴講生の平常の業務の関係等もあり毎年十一月より翌年四月に至る半ヶ年を一学期とし一ヶ月の開講期間は七日乃至十日間（一ヶ月講座）一日の講議時間は午後六時より九時迄の三時間」であること、聴講生は「完全に聴講する事が出来るが都合に依つては特に講座を選んで聴く事が出来る」こと、受講料は会員は「一講座二円」で、「指定のものを選んで聴講するものは一講座に付て三円である」こと、会員申込み先は「相馬農蚕学校内東北文化学院」であること、そして講師及び講座については「土田杏村氏に一切の事を依頼し目下同氏の手で銓衡中である」と記し、同記事は東北文化学院の開設は「地方文化に及ぼす影響は尠くないであろう」と結んでいる（『福島民報』1922年11月2日）。

農蚕学校に赴任して間もない田口が、この地で「東北文化学院」という名の自由大学を設立しようとした理由は明かではないが、新聞記事からは東北文化学院の趣旨は、「信濃自由大学趣意書」をほぼ踏襲していることが知られる。そして土田杏村と連絡を取っており、自由大学の名称は使っていないものの、自由大学運動の一翼を担うものであったといえる。

11月30日には農蚕学校教諭の田口富五郎と高野順次郎が中心となり開講打合会が開かれ、23年1月17日から開講し、4月までの講座が確定したことが知られる。新聞記事によれば、1月はタカラ・テル「文学論」、2月は出隆「哲学概論」、3月は堀経夫「経済学」、4月は土田杏村「思想問題概論」となっている（『福島民報』1922年11月2日、12月27日）。

田口が東北文化学院を開講するにあたっては、事務局を農蚕学校に置くこともあり、当時の佐藤弘毅校長にも了解を取りつけていたと考えられる。佐藤校長は、県立に移管されるとともに校長に就任し、以後1952年まで31年間にわたり校長を務めた人物であるが（福島県立相馬農業高等学校創立百

周年記念事業委員会編 2004) (4)、県立移管時に「校訓」を「綱領」と変え、その一は「労働ヲ愛シ、自治ノ精神ニヨリ学習スベシ」とし、それまでの「勤勞ヲ尊ブ」から「労働ヲ愛シ」に変え、自治の精神をうたうものにしており、大正デモクラシーの時代を反映したものになっている（相農史編纂委員会編 1973：223-226）。したがって、自由大学運動という新しい試みに、「東北文化学院」という名称での開設を認め、柔軟に対応したものと推測される。

2. 東北文化学院の講座

東北文化学院の第1回講座は、1923年1月17日から5日間、タカクラ・テルの「文学論」であった。講義内容は知られていないが、のちに『我等いかに生く可きか』（アルス、1923年）にまとめられる「文学論」の部分がその内容であったと考えられ、ロシア文学を中心に多くの文学作品に触れながら、宗教、哲学、科学、社会問題などと文学・芸術との関係について語ったものである(5)。当時の新聞記事では、「高倉文学士が近代思想に関する講記をなしつゝあるが聴講生は七十余名に達し昨今の寒気にもめげず熱心に聴講しつゝあり」とある（『福島民報』1923年1月23日）。また、期間中の1日、一般開放の特別公開講座として「イワンの馬鹿」を講演しているほか(6)、1月21日には小学校児童を対象としたお伽噺会が開かれている（『福島民報』1923年1月23日）。

タカクラによれば、聴講者は約60名で、教員が多かったという。土田杏村に宛てた手紙の中で、次のように書いている（土田杏村宛高倉輝の手紙、1923年1月22日）。

「今朝六時前帰ってきた 随分疲れた

原町に行くにはよほど汽車を考へて行かぬと勞びれる 君が行く時には前に都合の好いのを通知する 講義はとに角六十余の聴衆が最後まで残ったから成功だ だが教師ばかり多くて何か教育会の講習のやうな気持がしたが（聴衆の方にも其の気で来たものも多かった） 併しだんだん老先生が中心だから駆逐せられて若い連中が中心になる傾向だけは強めてきた 主催者田口は実に快男子だ どうか旨く成功さし度い 無線電信六百六十呎の頂きの方から小さく見える針金の上で作業をして居る所には全く驚嘆して了った それ位上の軽業は無い（最も減多に見られぬさうだ遇然今度見た）」

手紙からは、タカクラが、東北文化学院の運営者である田口富五郎に期待を寄せるとともに、1921年に竣工した高さ201メートルの巨大なコンクリート塔である原町無線塔の上で作業している様子に驚嘆したことが知られる。

なお、1922年に東北学院神学部を卒業し、日本基督教会原町教団教会に牧師として着任した成瀬高（たかし）(7)は、「自由大学についての覚書」（『あぶくま新報』1985年9月18日）の中で、

「私自身も当時（大正十一年頃）、菅野景助（？）と言う大学生の誘いを受けて自由大学の講演会に二、三出席したことがあった。

日時は確かではないが、第一回は鱒坂国義氏（改正小原）第二回が新進小説家の高倉輝民（後のタカクラ・テル）、当時「新約と旧約」と言う長編小説を出版されていた。第三回は新進哲学者出隆氏と記憶している。都合で出先生の講演会には出席することが出来なかったが、鱒坂氏と高倉氏の講演には出席して大変感銘を受けた事を覚えている。」

と回想している。しかし、小原国芳が1922年12月前後に福島県原町を訪問したという記録は残っていないので（筆者宛玉川大学教育博物館雨宮聖子のメール、2022年5月31日）、小原国芳が講義をしたという成瀬の回想は記憶違いである。

第2回講座は1923年2月に出席を予定していたが、信濃自由大学の第2期第4回講座で23年2月5日から9日まで出が出講することになったため、田口は急遽、3月に予定していた堀経夫と差し替え、堀の意向を聞いてもらえるように土田杏村と恒藤恭に手紙を出したが、土田と恒藤からは返事が来ていないため、山越脩蔵からも土田と恒藤に口添えをお願いしたものとみられる。それが、次のような手紙である（山越脩蔵宛田口富五郎の手紙、1923年1月29日、大槻編 2002：132-133）。

「拝啓前略

高倉氏の来原を願って漸く文学論を終りましたことは既報の如くで御座いました。並ならぬ御力添によってどうやら形だけは出来上りました。

二月の講座のことなのですが過日猪坂兄から御手紙を煩した訳でしたが……出先生は二月自由大学でおやりになって或はカチ会ふかも知れないと云ふ御手紙を大兄から戴きましたので二月は堀経夫氏を御願ひ申したいと存じて其の計画にかかりました。土田先生と恒藤先生へ御願ひして置きましたが何の御返事も御座いませんで不安を感じて来ました。も一度大兄から御願ひして下さいませんか。当方では非常に期待してゐます。

是非どうぞ大兄の御口添を願ひます。それから過日申上げて自然科学（数学、物理学、生理学、化学）を講座へ加へる件はどうでしせうか、是非やってみたいと存じます。しかし実行は土田先生の御教示を待つてからのことですが大兄の御指導も願ひます。二月からは私は自炊生活を初めますので遠方からの会員へ家を開放します。

では堀先生の方は何卒御手数煩し度く存じます」

田口の手紙では、堀経夫の出講の件の他に自然科学系の講座を開講する希望が披瀝されているのが注目される。養蚕の教員であった田口にとって自然科学系の講座の開講によって東北文化学院の特色を出そうとしたことがうかがえる。

この田口の手紙が功を奏したと思われ、東北文化学院の第2回講座は堀経夫が「経済学」を講義することになった。『福島民友新聞』（1923年2月13日夕刊）は、「相馬郡原町東北文化学院の本月講座は東北大学新設法学部助教授堀経夫氏の『経済学』にて来る廿四日より五日間毎日六時より同町小学校に於て開講する」とし、講座の日割りは「第一日産業革命、第二日資本主義の意義、第三日資本主義経済の発達、第四日社会主義外来思想の発達、第五日唯物史観」であること、また、東北文化学院の事務所を本町田口富五郎方とし、遠方からの会員のため「事務所を開放し宿舎とし実費だけ申受くる」と報じている。また、25日午後1時から「一般人のために公開し『自由と平等』に関する講演をなす筈」と伝えている（『福島民報』1923年2月13日）。

堀の講義が具体的にどのようなものであったのか、また、聴講者の反応など知る資料も発見されていない。ただし、堀の特別公開講演は、『福島民報』に9回にわたって連載されており、その内容を知ることができる⁽⁸⁾。

第3回講座は、出隆の「哲学史」で、3月26日から3日間、午後1時から6時までの講義が行われた。参考書として波多野精一『西洋哲学史要』（大日本図書、1901年）が指定され、当時の新聞記事にも波多野の著書の目次がそのまま紹介されている（『福島民報』1923年3月20日）。この出の講義は、信濃自由大学第2期第4回講座の「哲学史」でも波多野精一『西洋哲学史要』が参考書となっており、おそらく上田と同じ内容のものが講義されたと考えられる。出は、原町で講義したときのことを、次のように回想している（出 1963：195-196）。

「太平洋岸の原ノ町にも同様のサークル（注、自由大学－引用者）があつて、招かれて一日か二日、講演したような気がする。ここでは、いつなにをしゃべったか、てんで思いだせないが、とにかく、どす黒い沖から高波の打ち寄せる太平洋岸に近く、海外向けの無電発信所（千葉県船橋のはこれに対応する受信所とのことだった）があり、その放電用の高い柱が築きあげられてまもないこ

ろ、『哲学以前』が出版されて直ぐのちのことだったと思う。相馬焼の茶道具を一組、みやげにもらって、ながくそれを愛用したので、それとの連想で、無電発信所の内部を見せてもらったこと、懐中時計が『狂いますから、おあずかりしましょう』と係りの人からとりあげられたこと、農業学校の若い先生が放電の農作物への影響を長期計画で調査し始めてると話したことなど、そういうことは覚えているのに、自分のやった講演については、講演したかさえ覚えていない。」

出は、講義のことについては覚えていないが、原町無線塔を見学したときのことは印象深かったことが知られる。なお、出も27日に特別公開講演を行い、一般に公開している(9)。

東北文化学院（福島自由大学）講座一覧

回	開講年月日	日数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
1	1923. 1. 7 1923. 1.21	5日間 1日 1日	タカクラ・テル タカクラ・テル	文学論 (特別公開講演) イワ ンの馬鹿 お伽噺会(児童対象)	約60名	原町小学校
2	1923. 2.24 1923. 2.25	5日間 1日	堀 経 夫 堀 経 夫	経済学 (特別公開講演) 経済 政策の基礎としての 「自由と平等」		原町小学校
3	1923. 3.26 1923. 3.27	3日間 1日	出 隆 出 隆	哲学史 (特別公開講演) 常識 の基礎と哲学		原町小学校

おわりに

現在、東北文化学院で開講された講座は、1923年の1月から3月までの3回は知ることができる(10)。それ以後については『福島民報』を調べても東北文化学院に関する記事は出て来ない。いつごろ、どのような事情があって消滅したのかも不明である。事務局を担当していた田口富五郎は、1926年4月に群馬県利根農業学校に転勤し相馬農蚕学校から去るが(11)、東北文化学院は23年3月で閉講した可能性が高い。また、聴講者も教員が多かったというタカクラ・テルの手紙の文言以外は知られておらず、聴講者の年齢層や職業なども不明である。ただ福島民報が、東北文化学院の特別公開講演の内容を連載したことは、当時の県民に「自由大学」の学問がどのようなものであったのか、その一端を紹介する役割を果たしたといえよう。

注記

(1) 福島県いわき市出身の蛭田元起は、1975年に原町の現地調査をし、成瀬高の聴き取りを行っている。小林利通に宛てた葉書(1975年1月11日)には、「『福島自由大学』という名を冠していたかどうかは不明ですが、大正10年代

に、原町に自由大学的なものは、確かに存在していたようです。この自由大学的なものは、既製の青年団には共感出来なかった進歩的な青年たちが中心になっており、私が原町で、幸運にも捜すことの出来た成瀬高（なるせたかし 76歳）氏も、そのひとりだったのです。氏は、なんせ50余年も前のこと故、細かい事については、ほとんど忘れていますが、タクラ・テル氏のお話はよほど印象深かったとみえて、タクラ・テル氏が原町に来たことは覚えていました。」とある。

- (2) 小泉信三は、1978年に原町の現地調査を行い、相馬農業高校での聴き取り、門馬太氏、竹田忠夫氏の聴き取りをした結果について、筆者宛の手紙（1978年12月4日）で報告があり、その内容については、小泉信三「東北文化学院 田口富五郎について」（『自由大学研究通信』第2号、1979年）で公開した。
- (3) 石川組製糸は、埼玉県入間郡豊岡町に石川幾太郎が1893年に創業した製糸会社で、大正期に入って急速に業績を伸ばし、埼玉県内に2工場を開設するのに先だって1914年6月に福島県相馬郡原町に原町製糸合資会社と1年間の賃貸契約を結び試験操業という形で、埼玉県外への進出を開始したもので、単身赴任して本格的な進出の準備を始めたのは石川保次郎（旧制高篠）であった。石川組製糸原町工場は、24年には従業員583人、製糸産額16000貫で、石川組製糸全工場の中で2~3位の位置を維持し、原町紡織とともに原町経済界のトップリーダーの位置にあった（染井 2017：32-33）。石川一族はみなメソジスト系のクリスチャンで、家族的な経営をしたことで知られる。
- (4) 佐藤弘毅は、相馬郡立農業学校の教員時代に修身を教えていたが、当時生徒であった脇坂己鶴によれば、「修身の本はあっても読んだこともないし、開いたこともない。大正デモクラシーの話ばかりで、試験もデモクラシーの話だから、その話を一生懸命ノートに取るほかなかった」と回想しており（脇坂 2004：187）、佐藤が大正デモクラシーの思潮に影響を受けていたことがうかがえる。
- (5) タクラ・テルは、『我等いかに生く可きか』の「はしがき」の中で、「この一巻もと著者が大阪の文学講座、石ノ巻の文化学院、上田の自由大学、高知の市民講座、原ノ町の東北文化学院その他で行った講演を基として纏めて一としたもの」と記している。
- (6) タクラ・テルの特別公開講演「イワンの馬鹿」は、『福島民報』1923年2月[8]日から2月[18]日まで8回にわたり連載されたと思われるが、マイクロフィルムでは全8回のうち第1回と第6回、第8回が欠落している。『我等いかに生く可きか』所収の「イワンの莫迦」と内容を照合してみると、福島民報の方は、ロシアの童話・伝説には農民の間から生まれた「莫迦の話」多く、それが愛されていて、トルストイが粉本にした「イワンの莫迦」もその1つであるという部分は省略されている。また、「イワンの莫迦」を読んで、軍国主義が倒れるの、資本主義が倒れるの、莫迦の勝利だのという「理屈を言ふ」のは「余計なお世話」で、「皆心の底から動かされ」、「皆無意識の間にトルストイから或る新しい生命を注ぎ込まれた」のであり、「此の人を動かす、人を感動させると言ふこと以外に芸術は無い。これが芸術の総てなので有」る、というタクラの結論部分もないことが知られる。福島民報の連載は、トルストイの「イワンの馬鹿」の内容を紹介したものになっている。
- (7) 成瀬高は、上田市出身で、1922年に東北学院神学部を卒業すると、父親の銀一郎が日本鉄道会社の機関区長として赴任したのと一緒に原町教会に着任し、小高、原町、浪江3教会を兼務した。成瀬は、原町教会堂の修理を行い、定期集会を再開し文化活動も活発に行い教勢の挽回に努めた。中村教会の山野虎市牧師や鎌田昌次郎らとともに日曜学校相馬部会を結成して少年少女の宗教教育を盛んにし、1924年の夏期には相馬地域全教会合同の夏期臨海学校を新地磯浜海岸に開校して約60名の子ども・青年が参加して合宿生活を行ったりしている（二上英朗「はらまちキリスト教100年史」、<https://domingo.haramachi.net/haramachi-christ100year/>）。

なお、山野虎市は、魚沼自由大学の講師となった沖野岩三郎と同じ和歌山県出身で、明治学院を卒業後、佐賀県唐津の教会から徳島県の小松島教会、福島県伊達郡の川俣教会と転々としたのち、1919年に同県相馬郡の中村教会の牧師となったが病気が悪化し、22年10月に牧師の職を辞して上京、翌年2月には沖野の紹介で『金の星』編集部に入っている（野口 1989：291-308；東 1999：175）。原町教会の成瀬とも知己の間柄であった。山野は沖野とってきわめて重要な意味をもった友人で、大逆事件で沖野が間一髪で逮捕処刑を免れたのは山野の機転ある配慮によるものであったから、深い恩義があった。沖野の小説『生れざりせば』の主人公川田和志雄のモデルとなってい

る（村上 2011：64；野口 1989：306-314）。

- (8) 堀経夫の特別公開講演は「経済政策の基礎としての『自由と平等』」という題で、『福島民報』1923年3月6日から3月14日まで9回にわたり連載されている。この講演は、「経済とは財又は財の分配に関する社会的現象」のことで、これを「政策的に見るならば成るべく多くの効用を各人に齎すことが政策上の意味である」とし、「今日此の経済政策を分つて自由と平等の二政策となすことが出来る」と説明するところから始めている。世の中の富は平等に分配すればするほど効用が大となるが、世の中の人に平等に分配するだけの生産が講じられていない場合には分配と生産の間に衝突が起こってくるとし、その「生産は自由と関連して起つて来るものであるから結局自由と平等の衝突となる」とし、「この問題が解決されぬ限り経済政策は解決されない」と述べた上で、「この経済政策の解決のために苦心した学者の思想」として、1つは「自由放任主義によつて物質的効用を最大にしようとすることを根本思想とする」自由論の学者で、ヒューム、スミス、マルサス、ベンタム等をあげ、その中でベンタムとマルサスの学説を紹介している。もう1つは「自由主義の弊害を経済的平等政策によつてのぞかんと」する平等論で、英国社会主義の創始者であるウイリヤム・トムソンをあげ、その学説を紹介している。そして堀は、「今吾人は自由と平等の別れ路に立つてゐる」とし、「平等を原則とするか自由を原則とするか自由に平等を加味するか、平等に自由を加味する之等は我々に与へられた大きな問題である。そして両方を得ることが出来るか、一方だけか、いづれである。今後皆様と共に研究せねばならぬ問題であります」と述べて、講演を締めている。
- (9) 出隆の特別公開講演は「常識の基礎と哲学」という題で『福島民報』1923年4月7日から4月12日まで6回にわたって連載されている。出は、まず「常識」という言葉について、「常識とは誰にでもよく解つてゐる様で実は少し考へて見ると解つてゐまい」と述べて、「一体この常識とは何であらうか」と問い、常識の「基礎に立ち入つて即ち哲学的に考へて見たい」と述べている。「私は原の町の無線電信塔が何百尺あるか知らなかつたが皆さんはそれをよく御存知である。では私は常識は無いのか、でも通信省の役人は皆さんより以上に無線電信塔について知つてゐるとすればその人の方が皆さんより以上に無線電信塔について常識があると云へるのか」という例を挙げて、「一体常識があるとか無いとかいふのは何のことだらう」と問い、それは「常識を一つの知識内容と考へてその内容の量をどれだけと限らるとするからではあるまいか」と指摘し、「常識といふものが一般人の有すべきわかり易い知識又は一般人の容易に使用し得る判断力であることは確かだがそれは常識といふものゝ形式である。否常識は実に知識の或る形式であると言へよう」と、常識を定義する。そして、「普通に常識と言はるゝものゝ知識内容」は、「知識を有する個人の職業や知識程度の如何により、又その人の属する地方や時代の文化発達の程度如何により非常に違つてゐる。即ち知識の内容は固定しないで常に常識的なある活動につれて流動する」と述べている。「ある活動」というのは「知識を常識的とする活動である。即ち形式——内容を形つくる力——としての常識作用である。儘に活動と云ふ知識内容はある。が夫は一定した内容を有しない。たゞ其人その時代などによつて仮に固定した相を呈するのみである。即ち真の形式的なる常識は『これこれである』とさだめらるべきものではなく却てこれこれの知識が（これこれの人にとつて又はこれこれの時代に於て）常識となる。と考ふべきで真の常識（形式としての常識）はかくある知識を常識とするはたらきではあるまいか。——常識と云ふは普通には常識と云はれる或る知識内容と区別されないで同一視されてゐるが実はかゝる或る知識（内容としての知識）がその所有者にとつて常識的となつてゐるか否かによつて、その常識なるか否かが決定されるのだと思ふ」。出は、このように常識をとらえ、「如何なる知識も所謂専門的或は科学的の知識も又は哲学的の知識もその所有者にとつて常識的な明かさを有して来ねばならぬ即ち知識が其人の肉となり其用ふる概念がその人に生きて来なくてはならぬ」と説いた講演であつた。
- (10) 和田英子は、「富田碎花略年譜」の1923年の項に「信州福島自由大学でアイルランド文学を講義」と記載している（和田 1998：444）。信州には福島自由大学は設立されていないので、福島自由大学とはこの福島県原町の「東北文化学院」を指すものと考えられるが、それを裏づける史料は見つかっていない。なお、「ネットミュージアム 兵庫文学館」の「兵庫ゆかりの作家 富田碎花」（<http://www.artm.pref.hyogo.jp/ungaku/jousetsu/authors/a43/>）の「略年譜」、宮崎修二郎の「富田碎花略年譜」（宮崎 1985：249）にも同様の記載がある。
- (11) 田口富五郎は、群馬県利根農業学校、長野県上高井蚕業学校、群馬県勢多農林学校を経て再び群馬県立利根農林

学校に戻り、1942年4月に校長に昇任、45年3月に異動となる（『上田蚕糸専門学校一覧』1926年～37年、利根農林高校五十周年記念誌編輯委員会編 1970：288、351）。戦後は、新制高校の校長として人生を送ったと見られ。1952年4月から56年3月まで群馬県立佐波農業高等学校の校長となっていることが知られ、当時職員であった森村泰夫によれば、「づんぐりとしていて意欲にあふれた精悍な印象」であったという（群馬県立佐波農業高等学校創立50周年記念誌編集委員会編 1973：288-293）。なお、1955年には、上田蚕糸専門学校・信州大学繊維学部と同窓会組織「千曲会」の群馬支部にあたる群馬千曲会の会長となっている（中島 1955：1）。

引用・参考文献

- 出隆 1963 『出隆自伝』出隆著作集7、勁草書房。
- 大槻宏樹編 2002 『山越脩蔵選集－共生・経世・文化の世界－』前野書店。
- 群馬県立佐波農業高等学校創立50周年記念誌編集委員会編 1973 『佐波農50年』群馬県立佐波農業高等学校。
- 小泉信三 1979 「東北文化学院 田口富五郎について」（『自由大学研究通信』第2号）。
- 相農史編纂委員会編 1973 『相農史』上巻、福島県立相馬農業高等学校。
- 染井佳夫 2017 「保次郎と信雄－石川組製糸の原ノ町進出と子女の文学活動－」（『シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム2017』横浜歴史資産調査会）。
- 利根農林高校五十周年記念誌編輯委員会編 1970 『利根農林高校五十周年誌』利根農林高等学校。
- 中島暹 1955 「群馬支部総会出席記」（『千曲会報』第50号）。
- 東道人 1999 『野口雨情 童謡の時代』踏青社。
- 福島県立相馬農業高等学校百周年記念事業委員会編 2004 『佐藤弘毅先生の生涯』福島県立相馬農業高等学校百周年記念事業委員会。
- 南相馬市教育委員会博物館市史編さん係編 2008 『原町市史』第11巻（特別編IV、旧町村史、南相馬市）。
- 田口富五郎 1922a 「苦悩」（上田蚕糸専門学校『校友会雑誌』第9号）。
- 田口富五郎 1922b 「弁論部報告」（上田蚕糸専門学校『校友会雑誌』第9号）。
- 宮崎修二郎 1985 『人の花まづ砕けたり－詩士富田碎花翁のおもかげ－』ジュンク堂書店。
- 村上文昭 2011 『藤村から始まる白金文学誌』明治学院キリスト教研究所。
- 脇坂己鶴 2004 「佐藤弘毅先生を偲ぶ」（福島県立相馬農業高等学校百周年記念事業委員会編『佐藤弘毅先生の生涯』福島県立相馬農業高等学校百周年記念事業委員会）。
- 和田英子 1998 『風の如き人への手紙－詩人富田碎花宛書簡ノート－』編集工房ノア。

（2025年8月25日、一部加筆修正）

